

田代よいとこ - その9 - 江ノ島と戸倉の弁天社

戸倉の角田大橋脇にある市杵島（いちきしま）神社をご存知でしょうか。通称「戸倉の弁天社」です。

この弁天様と藤沢の江ノ島の弁天様、半原の塩川滝にまつわる言い伝えをご紹介します。

まず、上流の塩川滝から。江戸時代に編纂された『新編相模国風土記稿』によると、塩川滝上段の滝壺は三間四方（約30平方メートル）ほどで、底の深さは計り知れません。村人が綱をおろして淵の深さを測って見たのですが、70尋（ひろ）＝約126mでも綱が底に着かなかったとか。

さて、この淵にあるとき木こりがやってきて、大切な鉈（なた）を落としてしまったところ、数日後に遠い江ノ島の海辺で発見されたということです。鉈とは別に、弁当箱を落とし、それが江ノ島の岩屋で見つかったという言い伝えもあります。いずれにせよ、村人たちは、江ノ島とこの淵が水底でつながっていると信じ、「江ノ島淵」というようになりました。

さて、戸倉の弁天様です。その底がやはり江ノ島の岩屋に通じているといわれています。むかし、江ノ島の弁天様が、岩屋から穴伝いに塩川滝の江ノ島淵に向かっていったところ、途中で疲れてしまい、思わず水上に顔を出しました。これを見た村人がもったいないことだと伏し拝み、近くの岩の上に弁天様をまつたのが今の弁天社の始まりで、この裏手の淵を「弁天淵」と呼ぶようになりました。

ところで、どうしてこのような伝承ができたのでしょうか。1つの仮説として考えられるのは、水脈を通じて信仰（ここでは水神＝弁天）が伝わっていたのではないかとことです。ではだれがそれを伝えたのか？これも想像でしかないのですが、丹沢の峰々を修行の場としていた八管修験（はずげしゅげん）と呼ばれる山伏集団ではなかったかと考えられます。八管修験の本拠地は、中津の八管山です。

おもしろいことに、中津川のもっとずっと上流の宮ヶ瀬にも川の中ほどに「江ノ島」とよばれる島があり、やはり水底が藤沢の江ノ島につながっているという伝承があります。



市杵島神社（戸倉の弁天社）

【参考文献】

『新編相模国風土記稿』『なかがわ風土記259号 愛川町の史跡、名勝をゆく(下)－修験の八管神社と昔話を求めて－』（渡部 仁 丸井図書編集部1999年）『日本伝説集』（高木敏雄 宝文館出版1990年）

見事な紅葉にびっくり～6年生修学旅行～

10月27日（月）～28日（火）6年生が日光修学旅行へ行ってきました。好天に恵まれ楽しい思い出をたくさん作ってきました。〈児童作文より〉

修学旅行の思い出

花上 幹太

ぼくが修学旅行の思い出に残ったのは、一番目は湯滝です。すごく流れが速くてびっくりしました。しかもすごく近くで見れてはくりょくもありました。

二番目は東照宮です。鳴き竜は、頭の下でしか竜が鳴かないのを初めて知りました。係の人が、さすが転がる音と言っていました。本当にすずの音がしました。眠り猫は、もうちょっと大きなものだと思っていたら、意外と小さくて、びっくりしました。三猿は、本当の猿みたいで驚きました。大猷院は、地味と聞いていたのですが、ものすごくお金を使っていて派手でした。

ぼくは、修学旅行が楽しく、しっかりといろいろなことを学べたと思います。そして、日本の昔ながらの風景にしっかりとふれられて、とてもいい経験になりました。

